



◎札幌尋常中学校として開校、1950年に現校名に改称。「堅忍不拔」「自主自律」を掲げ、調和の取れた人格の形成を目指す。部活動では、2011年度に、陸上競技部、弓道部、ダンス部、放送局（部）が全国大会への出場を果たした。

設立	1895(明治28)年
形態	全日制・定時制／普通科／共学
生徒数	1学年約320人
11年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、北海道大、旭川医科大、札幌医科大、東北大、東京大、東京工業大、一橋大、京都市大、大阪大などに250人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大、立命館大など延べ273人が合格。
住所	〒064-8611 北海道札幌市中央区南18条西6-1-1
電話	011-521-2311
Web Site	http://www.sapporominami.hokkaido-c.ed.jp/

北海道
札幌南高校

進路意識向上

3年間を見通した 進路体系を生徒の 変化に合わせて再構築

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎学区撤廃で成績上位層が増加し、地域の期待が集まる。加えて、札幌市内の進学校で切磋琢磨する機運が高まる</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎3年間を見通した指導の体系化、生徒の視野を広げる進路学習の整備、課題プリントや補習の充実を進める</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎学校の方向性が定まり、自校の取り組みに対する教師たちの自信が深まった</p> <p>STEP 3</p>
---	---	---

市内の学区撤廃により
成績上位層の生徒が増加

北海道札幌南高校は、2008年度から高校3年間を見通した進路指導の体系化と教師の目線合わせを軸とした改革を進めている。

同校の進路実績は堅調で、例えば、東京大合格者は08年度入試で11人、翌09年度は21人と大きく伸びた。この実績を維持しようという意識が校内で高まったことが、改革の背景の1つにある。

更に、09年度高校入試から札幌市内の学区が撤廃されたことも、教師の改革意欲につながった。かつて札幌市は東西南北の4学区に分かれていたが、この年度の入試から市内のどの中学校からでも受験できるようになった。こうした変化について、3学年担任の高桑知哉先生は次のように話す。

「学区が撤廃されてから、札幌市西区や北区など、以前は本校の学区外であった地域から通学する生徒が大幅に増えました。自宅から遠いにもかかわらず、本校を選んだ生徒たちの期待に応えなければならぬと強く感じています」

札幌市内の進学校の間で、切磋琢磨する機運が高まりつつあったことも、同校の改革を後押しした。同校が改革に着手した頃から、札幌北高校、札幌東高校、札幌西高校、及び同校の4

校で、毎年、一部の外部模試を合同受験している。市内全体で生徒が競い合い、刺激を与え合う雰囲気醸成されつつあった。進路部長の榎戸智司先生は次のように述べる。

「市内の4校は、切磋琢磨するライバルであると同時に、互いを励まし合い、支え合う仲間でもあります。他校の優れた取り組みに刺激を受け、一緒に出来ることはないかと常に相談し、考えています。また、成績上位層を意欲的に伸ばしていく指導や取り組みを体系化し俯瞰して見る姿勢など、他校に学びながら自校の指導を見直しています。どの学校の教師も共通して抱いているのは、『北海道全体の教育の質を高めていきたい』という思いです。日本のみならず世界で活躍する人材



北海道札幌南高校
榎戸智司 えのきど・さとし

教職歴24年。同校に赴任して7年目。進路部長。「自ら考える生徒を育てたい」



北海道札幌南高校
石見博史 いしみ・ひろし

教職歴33年。同校に赴任して5年目。進路部副部長。「夢を持ち続けている限り、どんな形にせよ実現することを生徒に伝えたい」



北海道札幌南高校
高桑知哉 たかくわ・ともや

教職歴21年。同校に赴任して4年目。3学年担任。「心・知・体」のバランスの取れた生徒を育てたい」

を育成するために、他校の先生方と話し合い、高め合っていきたいと思っています」

生徒の10年後を見据えた 進路指導の重要性を共有

進路指導の体系化は、08年度の1年生から始めた。全ての取り組みを列挙し、その一つひとつの狙いや方法を明確にし、図式化した。他学年も、同学年の方法を参考にしながら指導計画を立て、それに基づいて09年度から全学年が動き始めた。08年度の1学年担任を務めた進路部副部長の石見博史先生は、当時を次のように振り返る。

「本校は伝統的に学年主導型の指導であり、ある取り組みが成功しても、そのノウハウが次の学年に引き継がれることがあまりありませんでした。学校全体で動くためには、学年を超えて教師が共有すべき指針が必要だったのです。何か新しい取り組みを始めたというよりは、それまで行ってきたことを整理し、意義付けを行ったに過ぎません。これまでの取り組みの良さを残しつつ、学校としてもう一段階成長するためには、教師間で目線を合わせて指導に臨むことが不可欠だと思います」

体系化を進めるに当たり、教師が心掛けたのは、生徒が見通しを持って取り組める年間計画

を立てることだ。重要な取り組みは全て、方法や目的、留意すべき点を明示して、生徒にも目的意識が浸透するよう留意した（P.18図）。

教師間で指導方針のすり合わせをする過程で、最も意見が分かれたのは、現役合格を重視すべきか、浪人をしてでも希望を貫かせるべきかという点だった。そこで出た結論は、始めに現役ありき、浪人ありきという方針ではなく、「二人ひとりの生徒の将来を見据えて、最善の進路を考えていく」ということだった。

「生徒に10年後、20年後を真剣に考えさせることを重視しました。目の前の壁への対策ではなく、将来を考えた時、今の自分にとってどの選択が最良なのか。生徒自身が考えた上で決意できるようにすることが重要だと話し合ったのです。教師には、幅広い選択肢を示して生徒の視野を広げ、現役・浪人を問わず共に進路を考える姿勢が求められます。これまで、そうした指導を心掛けてきた教師は多くいましたが、改めて学校全体で方針を共有したことで、ぶれない進路指導が可能になりました」（榎戸先生）

校内実力テストについても、回ごとの位置付けを明確化し、平均点の管理も心掛けるようになった。教科ごとの難易度の差や平均点のばらつきを是正し、偏差値がいくつなら北海道大を狙えるというように、合否判定が出来る精度の高さを追求していく考えだ。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

生徒の視野を広げる
多様な進路学習

生徒の視野を広げるための進路学習の充実も
図った。その背景には、生徒の希望進路の偏り

由で、医学部にこだわる生徒の意識を変える
必要がありました。「人の生命を救う仕事」は、
医師だけではなく、多様な選択肢の中から選び取
ってほしいと考えたのです」(高桑先生)

1 学年		進路だより		第3号 平成23年5月10日(火)	
4月11日(月)の学年集会では、南高での3年間の流れ(1年生:職業について知る、2年生:大学について知る、3年生:受験に向けた総仕上げ)の概略を説明しました。今日は、この1年間の進路指導の流れを説明します。 この1年間は、下の表のように行っています。自分は将来どのように社会に貢献していくのか、そのためには高校卒業後どのような進路を選ぶべきなのか、しっかり考えていきましょう。					
1 学年 進路指導1年間の流れ					
月	主な学校行事	学年LHR	校内実力テスト・講習・面談等	模擬試験	備考
4月	8(金)入学式	12(火)スタディーサポート 第1回	校内実力テスト 生徒面談①		
5月	中旬 PTA総会・保護者懇談会 下旬～ 高体連支部大会	10(火)進路指導1年間の流れ(LHR) 19(水)スタディーサポート返却(LHR)	11(水)第1回校内実力テスト 中旬 保護者懇談会(PTA総会に合わせて)		①指導内容の定着、②高学力の養成、③進路実現のための学力定着を目指して、年3回(5月・10月・2月)実施されます。レベルの高い問題にチャレンジすることによって、豊かな実力をつけていきます。
6月	第1回定期考査 8(水)-13(月) 15(水)春の生徒会行事	16(木)「進路のしおり」配布・説明	上旬 夏期講習計画発表		※2年次選択科目についての指導と確定
7月	学校祭 8(金)-10(日) 夏期休業 23(土)～	6～14月の10日間を利用して「進路学習」を行います。「何のために、どんな学部・学科を選択するのか」を考えるための第一歩として、まずは大学卒業後の職業を中心に知識を学び、考えたいきます。レポートにより各自調べたことを提出してもらった場合もあります。	夏期講習 23(土)-28(木)	16(水)進路総合学力テスト	全国で40万人以上の生徒が受ける模擬試験で、全国レベルの中で自分の力を確認します。日頃の学習の成果を評価できるように頑張らしましょう。11月にも実施され、いずれも学校で一斉して申し込み、学校会場で受験します。
8月	17(水)始業日	進路学習=計7回(LHR) 25(木)進路学習ガイダンス(LHR)	英・数・国3教科で実施されます。普段の授業だけではカバーできない難関校受験を行います。大学受験に向けて、準いうちから実力アップに取り組みしましょう。		卒業生と語る会
9月	第2回定期考査 7(木)-8(火) 15(木)16(金)秋の生徒会行事	8(木)職業研究①(LHR)	生徒面談②		大学生になっている先輩を招き、各大学の話を聞いていただきます。進路実現の方法、大学生の実際など、さまざまな疑問を、アットホームな雰囲気の中で聞くことができます。8～9月にかけて、複数回実施予定です。

毎年5月に配布する「進路だより」には1年間の進路行事をまとめて掲載する。生徒に行事の狙いや取り組み心構えを示している
*学校資料をそのまま掲載

がある。同校の生徒は医学部志望者が多く、その割合は入学者の3分の1に上る。しかし、中には、医療についての知識が乏しいのに医師を希望する生徒や、最初から「医師になるものだ」と思い込んでいる生徒も多く、教師はもっと広い視野で将来を考えてほしいと感じていた。

「医学部を志望すること自体は良いのですが、自分の適性を考えず、やみくもに志望する生徒が見受けられることが問題でした。成績が良いから、他の職業を知らないからというだけの理由で、医学部にこだわる生徒の意識を変える必要がありました。『人の生命を救う仕事』は、医師だけではなく、多様な選択肢の中から選び取ってほしいと考えたのです」(高桑先生)

北海道大の教授を招いた「進路講演会」では、近年の学問領域の広がりや、学問の融合化をテーマに語ってもらった。また、「卒業生と語る会」を8月下旬から9月上旬にかけて行い、札幌医科大学、東京大(文・理、後期日程合格者)、一橋大、京都大に通う卒業生を招いて、大学の学びや受験勉強のアドバイスなどについて在校生と語り合ってもらった。

1・2年次の秋には「職業人インタビュー」を行った。これは、自分の家族の職業についてレポートをまとめ、生徒間で共有する取り組みだ。報告し合うことで、周囲の人以外の職業に目を向けるきっかけとするのが狙いである。

このような進路学習の他に、生徒の志望を広げるために、面談をより重視するようになった。

「理由も明確でないまま医学部を志望する生徒には、本当にそれで良いのか、東京大や京都大のような総合大学ならば、医学だけでなく幅広く学ぶことも出来るのではないかと揺さぶりをかけていきます。また、学力が不足している場合は、今の学習方法で良いのか、志望を実現するためにどのような努力が必要かなど、現実を見せて覚悟を促します。教師が問い続け、生徒自身にしっかり考えさせることが、生徒の幅広い進路を保証することにつながると考えています」(榎戸先生)

時に励まし、時に厳しく現実を突き付ける。教師によってアプローチは異なっても、生徒の

10年後、20年後を見据えて最適な進路を考えるという方針が共有されているので、基本線がぶれることはない。

生徒のやる気に火をつける 「きっかけ」づくり

生徒の主体的な学びや自律的な活動を重視する方針は、同校では創立以来の不文律となっている。ただし、ここ数年は生徒の気質が変化し、中学校の成績上位層が集まる同校においても、受け身の生徒が増えているという。

「本校では伝統的に生徒の自主自律を重んじています。しかし、そのあり方は時代の要請と共に変わっていくものだとも思うのです。目の前の生徒を見て、進路への意識付けだけでなく、教科面でも刺激を与える必要性を感じました」(榎戸先生)

そうした中、教師が意識するのは、学びに向かうための仕組みをどう準備するかである。具体的には、課題の提出や補習を必須とするなど、単に手取り足取りの指導をするのではなく、教師がある程度、生徒の学びをリードしつつ、さりげなく意欲を刺激していく手法を取っている。そのさじ加減は、榎戸先生いわく「1から10まで手を出すのではなく、1から3くらいまで手を掛ける」感覚であるという。

例えば、高桑先生は担当教科の化学で、2年

次の秋から3年次2学期まで、週2〜3回のペースで早朝講義を行った。同校では原則として朝学習や放課後補習は行わないため、この早朝講義は自由参加であったが、常時40〜60人の生徒が受講し続けたという。また、国語科担当の榎戸先生は、3年次の秋に現代文の放課後補習への参加者を募ったところ、初回到20人程の参加があったため、5回の臨時補習を組んだ。

「本校の生徒は基本的に学ぶことが好きで、多くの生徒が学習の仕方やペースを構築する力を持っています。教師がすべきことは、そうした生徒たちの心に火をつけるかということだと思っています」(高桑先生)

石見先生は、現代文の授業で生徒に書かせた要約文のうち、優秀なものを印刷して配布している。「もっと上手に書きたい」「自分ならもっとうまく書けるのに」という生徒の意欲を刺激するのが狙いだ。

「本校には学習に対してプライドを持って入ってくる生徒がほとんどです。そのプライドをくすぐり、切磋琢磨する雰囲気をつくり出し、生徒の意欲を引き出していきたいと思っています」(石見先生)

前年踏襲ではなく、 目の前の生徒に応じた指導を追求

自主学習用の課題プリントが定着したのも、

ここ数年のことである。生徒が自由に持ち帰って取り組めるよう、教科を問わず、各階のレターケースにプリントを常置している。ほとんどの生徒が自主的に取り組んでいるという。

「プリント学習を継続することで地力が付き、自分で羽ばたいていけることに気付かせるのが狙いです。いずれは生徒が自律的に取り組むようになるのが理想ですが、自分とどどん進める生徒がいる一方、『プリントが終わったのでどうしましょう』と、最後まで教師に頼ってくる生徒も少なくありません。さまざまな学校の取り組みを見ても、本校は『まだまだこれからだ』と感じます。変化していく生徒をつぶさに見取り、教師自身も学びながら、自律的な生徒を育成するために取り組みの改善を続けていきたいと思っています」(榎戸先生)

体系化した指導を更に改善しつつ、次の学年に引き継いでいくことも、今後の課題である。

「取り組みを整理し、学校の方向性を明確にしたことで、一つひとつの取り組みに対して先生方が自信を持って臨んでいると感じます。ただ、正直なところ、ようやくスタートラインに立てたというのが、私の実感です。今後、先生方との共通理解を更に深め、取り組みをどのように発展させるのか、生徒の変化を捉えながら知恵を出し合っていきたいと思っています」(石見先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2011年6月号指導変革の軌跡「三重県立四日市高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)